

「教職実践演習(幼稚園)」実践報告・共通理解の必要性 －相互理解による活動の変化について－

米窪洋介* 山田悠莉* 鳥居恵治* 小野 隆* 大岩みちの** 佐善 圭**

要 旨

平成23年度からスタートした教職実践演習(幼稚園)が2年目を迎え、授業進行について教員間で毎授業後にミーティングを行うことにより授業の改善を試みた。このことにより、教員間、学生と教員間の共通理解が深まり、授業の目的意識を高めることに繋がった。さらに、学生間においても主体的な活動を通して授業を進めていく過程で、共通理解の重要性を再認識するに至った。教職実践演習(幼稚園)の実施においては、文部科学省からの通知において踏まえる事項である、「社会性」や「対人関係能力」に対する事項を修得し得ることが分かった。

Abstract

For investigating changes in mothers' perception towards infant emotions and use of context, this study viewed the infant stage microscopically to cover their immature linguistic ability. The findings were that mothers perceived infant emotions through children's facial, behavioral and vocal expressions and context (their playthings) and also mother's internal attitude and beliefs about child rearing, and that mothers having developmentally-disabled infants tended to polarize about the use of child-focus information into a frequent-user group and an infrequent-user group.

キーワード：教職実践演習、振り返り、アンケート、共通理解、幼児教育祭

I. はじめに

岡崎女子短期大学幼児教育学科(以下、本学とする)における平成24年度の教職実践演習(幼稚園)(以下、教職実践演習とする)は、第一部2年生6クラスを対象に教員6名が担当した。平成23年度より実施した教職実践演習が2年目を迎えるにあたり、新たに加わった教員を含めて1年目の課題を振り返りながら、授業を進めていく運びとなった。教員間で、授業計画や授業内容についての再確認を行うと共に、前年度の課題について話し合い、以下の5点が新たな課題として浮上した。

- ① 学生の仲間意識を高めることによる相互理解について
- ② クラスの姿を理解した上での指導について
- ③ 教員間でクラスの状況を共有することについて
- ④ 学生と教員が相互に学ぶことで共通理解を深めていくことについて
- ⑤ 効果的なチーム・ティーチングについて

このことから、初年度の反省点として、学生間、教員間、学生と教員間の様々な立場での共通理解が必要であることが浮き彫りとなり、「報告・連絡・相談」を授業進行の重要な柱の一つに据えた。

II. 研究目的

そこで、後期10月開講の授業に対し、前期4月の段階から月1回の授業担当教員間の打合せ会議を開催することで、教員間における授業の目的意識を高めるように努めた。さらに、授業が開始された後期においては、授業終了後、1時間程度のミーティングを行い、各クラス担当教員からの状況および翌週の授業内容の確認を徹底した。また、学生と教員の授業に対する取り組み意識にも重点を置き、アンケート(学生・教員)の実施と16回目に行う授業では、学生一人一人、各クラス、学年全体の振り返りを通して、授業のまとめを行った。

以上のことを踏まえて、本研究は、相互理解が深まることによる個人およびクラス活動の変化につ

* 岡崎女子短期大学 ** 岡崎女子大学

いて「アンケート」と「振り返り」を分析し、授業に対する取り組み方にどのような変化が起こるのかを考察することで、共通理解の必要性を探ることを目的とする。

Ⅲ. 授業内容・授業計画

1. 目的・目標

中央教育審議会より平成18年に提出された、「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」の、「別添1教職実践演習(仮称)について」の中で、「教職実践演習」の趣旨は、全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」であり、自己にとっての課題を自覚し、必要に応じて不足している知識や技能を補い、定着させることで教職生活を円滑にスタートできることとされている。

また、授業実施にあたり以下の4点を踏まえることが適切であると示されている。

- ① 使命感や責任感、教育的愛情に関する事項
- ② 社会性や対人関係能力に関する事項
- ③ 幼児児童生徒理解や学級経営案等に関する事項
- ④ 教科・保育内容等の指導力に関する事項

そこで、本学における教職実践演習では、授業の目的を「保育者に必要な資質能力を再確認し、これまでの学修全体をまとめていく演習を通して、保育現場における実践を担うことのできる力量の形成を目指す」¹⁾とした。その上で、到達目標を以下の2点と定め、入学してからの実践力を仕上げる科目として位置づけた。

- ① 学生のこれまでの学習内容や理解度を踏まえて、保育者になるに当たって不足している知識や技能を補うとともに、場面に応じてどのように対応する必要があるかを分かり合う。
- ② 作品制作や活動発表を通して、子ども達とのコミュニケーションの図り方を身につけ、作品や発表から発展・展開する遊びの時間を子ども達と共有できるようにする。

2. 内容

本学における教職実践演習は全17回(32時間)の授業があり、全体の授業内容は表1で示した通りである。学生が園生活の行事として行われる「生活発表会」を想定して主体的に活動を始める8回目以降からは、以後14・15回目の幼児教育祭での発表に向

けて準備を進めていくこととなる。その中で学生は、教師役と子ども役を互いに入れ替わり、それぞれの立場でロールプレイをしながら表現することから、カウンセリング・マインドについて学ぶ内容となっている。

また、学生の活動は、「舞台発表(ファンタジーワールド)」「フロア劇(シアターランド)」「運動あそび(子どもランド)」の3種類に分類することができる。「舞台発表(ファンタジーワールド)」では本学SKホールにおいて、劇やミュージカルなどが行われ、ホール手前のホワイエ空間をカーテンやパネルを用いて仕切り、「フロア劇」などを行っている。さらに、「運動あそび」では、本学の体育館に段ボールで制作した壁を用いて巨大迷路をつくり、ブースを設けてアトラクションを行うようにしている。

各活動自体はクラスごとの選択制となっているが、中でも「舞台発表(ファンタジーワールド)」での発表に希望が集中する。幼児教育祭(行事)においての時間的・空間的に限られた条件の中では、クラスの希望すべてに添うことができない。ゆえに、生活発表会を意識した月案を学生が作成し、活動の目的や内容をコンペ形式でプレゼンテーションすることにより、教員の審査を経て「舞台発表(ファンタジーワールド)」をするクラスを決定している。その後クラスごとに担当場所が割り振られ、教員が1名ずつクラスを受け持つと共に、全クラスに向けて各教員の専門性による指導も行っている。発表をより良いものにしたいとの思いから、幼児教育祭当日までの8~13回の授業以外に、自分たちで共同作業をする時間を見つけて準備に当てている。なお、前日には本学三付属幼稚園の園児を招き、リハーサルを行うことで、子どもと向き合い、子どもの反応から自分達で振り返りながら、本番に向けた最終調整を行っている。

表1 授業計画

回	内容	時間
1	全体会 保育・教育課程 長期指導計画 短期指導計画について 履修カルテ記入	1・2
2	長期指導計画(年間計画) シミュレーション 生活発表会に向けた3学期3か月の月週案	3・4
3	付属幼稚園の見学・観察(クラス経営を学ぶ)	5・6
4	全体会 付属三園園長先生のお話	7・8
5	幼児教育祭当日の日程説明・子どもとの関わりやロールプレイにおける配慮等 →具体的な計画案作成	9・10

回	内容	時間
6	各クラスの計画案提出コンペ(計画案説明)を行う	11・12
7	クラスの内容に従って、計画全体像の提出。クラスごとに重点化されたものをロールプレイによって表現しながら、カウンセリング・マインドについて学ぶ	13・14
8 ～ 13	クラスごとに重点化されたものをロールプレイによって表現しながら、カウンセリング・マインドについて学ぶ	15～26
14	幼児教育祭 (計画案を提示する) 一日目	27・28
15	幼児教育祭 (計画案を提示する) 二日目	29・30
16	総括	31
17	履修カルテ記入	32

表2【舞台発表】

回	内容
8	劇の内容を話し合う、脚本の制作、配役決め
9	中間発表
10	衣装制作
11	大道具・小道具の制作
12	音響、照明の確認
13	リハーサル
14	各クラス1公演、反省会、翌日の準備
15	各クラス1公演、反省会、片付け

表3【フロア劇】

回	内容
8	劇の内容を話し合う、脚本の制作、配役決め
9	中間発表
10	衣装制作
11	大道具・小道具の制作
12	音響、照明の確認
13	会場設営・リハーサル
14	1公演、反省会、翌日の準備
15	1公演、反省会、片付け

表4【運動あそび】

回	内容
8	全体のテーマおよび内容を決める
9	グループごとアトラクションの内容を決める
10	グループごとの制作
11	グループごとの制作
12	グループごとの制作
13	段ボール迷路・アトラクションの設置
14	9:00～16:00、反省会、翌日の準備
15	9:00～16:00、反省会

3. 幼児教育祭について

幼児教育祭とは、本学において教職実践演習が実施される以前から行われてきた行事であり、本学独自科目「保育内容総合」の授業における活動や取り組みの積み重ねを発表する機会として位置づけら

れていたものであった。15年間におよぶ取り組みをまとめたところ、平成19年度には「特色ある大学教育支援プログラム」として文部科学省より選定を受け²⁾、昨年度で19回目を迎えるに至った。現在は、教科目の改変に伴い「教職実践演習」において文部科学省から求められた内容に基づいた取り組みを始めている。授業内では、子どもたちが楽しむ空間を提供しようと様々な経験をし、葛藤を乗り越えながら進めていく過程の中で、企画力・運営力・対人関係能力などを身につける貴重な時間となっている。

参加学生は、第一部2年生以外にも、第一部1年生(全日制2年課程)および第三部1、2、3年生(昼間定時交替制3年課程)であり、本学全体で取り組んでいる行事でもある。学生の中には、本学入学以前(幼少期や大学見学時)に劇を見たり、巨大迷路で遊んだりした経験があり、幼児教育祭を自ら行うことに対する思い入れのある学生も多い。

毎年2日間の会期中、3,000～4,000人の地域からの来場者を迎え、次年度にも期待を寄せる声があがっている。

表5 発表内容

ファンタジーワールド(舞台発表)	
クラス	内容
2B	1番はだあれ?～神様から十二支～
2C	ごめんね、ロボたん～ハートをさがせ～
2L	ぼくらのむしむし大冒険!!
シアターランド(フロア劇)	
クラス	内容
2A	ガチャガチャおかたづけ
子どもランド(運動あそび)	
クラス	内容
2D	大きくなったら何になる?
2K	～みんなの夢はなあと～



写真1 舞台発表



写真2 フロアー劇



写真3 運動あそび

IV. 研究の概要

1. 研究方法

幼児教育祭に向けて、学生が主体となって活動を始めてからの毎授業後(8~15回目)に行った「アンケート(学生・教員)」と授業の総括(16回目)で行った「振り返り」を用いて、授業の最終段階に向けた学生と教員の意識の変化について分析をし、共通理解の必要性について考察を行う。

2. 対象

- ① 本学、教職実践演習担当教員 6名
 〈内訳〉
 - ・舞台発表担当 3名
 - ・フロアー劇担当 1名
 - ・運動あそび担当 2名
- ② 本学、第一部2年生 6クラス(236名)
 〈内訳〉
 - ・舞台発表選択 3クラス(118名)
 - ・フロアー劇選択 1クラス(39名)
 - ・運動あそび選択 2クラス(79名)

3. 調査期日

- ① アンケート(学生・教員)
 2012年12月21日から2013年2月10日までの
 毎授業後(8回)
- ② 振り返り
 2013年2月15日の「総括」の時間

4. 分析方法

- ① アンケート全 21 項目のうち表 6、(a) (b) に該当する項目を任意に抽出し分析を行う。
 (a) 相互の関わりや共通理解の魅力を感じた項目
 (b) 取り組みに関する項目
- ② 期日の経過に伴う、(a) (b) の自己評価の変化について分析を行う。
- ③ (a) (b) の関連性について検討する。
- ④ 選択内容による意識の変化について分析を行う。
- ⑤ 「振り返り」で学生が記述した内容の分析を行う。

表6 アンケート内容

(a)	Q6 人と関わることの楽しさを味わう。
	Q9 自分の感情や考えを伝え合う喜びを十分に味わう。
(b)	Q4 自らが周囲に働きかけることにより多様な感情を体感する。
	Q7 伝え合い共感し合うことなどを通して自分から関わろうとする。
	Q12 美しいもの、優れたものなど様々なことに出会い、そこから得た感動を他者と共有し様々に表現する。
	Q16 集団において他者と連携し、協力して課題に取り組む。
	Q17 他者の声を真摯に受け止め、公平な姿勢、受容的な態度で接する。
	Q20 子どもの反応を生かし、皆を巻き込みながら保育を展開する。

V. 結果と考察

1. 学生アンケート

1) 全体

学生アンケートの結果から、9回目と11回目の2回に特徴的な数値の低下が見られた。9回目は冬休み後、生活の節目となる成人式直後に中間発表を実施したため、休みを挟んだことによって共通理解に向かう意識が希薄となったこと、中間発表を実施したことで自分たちの準備不足について振り返りをしたために自己評価が下がったものと考えられる。

11回目は、アクシデント(時間等の連絡調整ミス)が起きたことから、共通理解の重要性を強く意識した結果の表れであると推察した。

また、幼児教育祭当日(14・15回目)が近づくとつれ、自己評価の数値が高くなり、活動を振り返りながら継続することで、各自が主体的に取り組めるようになったこと、評価項目を活動のねらいとして意識しながら活動を展開したことが読み取れた。さらに、子どもと関わりながら展開する幼児教育祭当日が最も高い数値を示したことから、この授業の活動が保育実践力を高める一助となっていることが理解できた。

表7 学生アンケート(五件法平均値)

	8	9	10	11	12	13	14	15
Q6	3.9	3.8 ↓	3.9	3.7 ↓	3.9	4.3	4.6	4.7
Q9	3.8	3.3 ↓	3.6	3.5 ↓	3.6	4.1	4.5	4.7
Q4	4.0	3.4 ↓	3.6	3.4 ↓	4.0	4.0	4.3	4.8
Q7	4.0	3.7 ↓	3.6 ↓	3.6	4.0	4.1	4.3	4.7
Q12	3.7	3.2 ↓	3.3	3.3	3.5	4.0	4.5	4.5
Q16	3.0	3.7	3.8	3.5 ↓	4.0	4.2	4.6	4.7
Q17	3.8	3.7 ↓	3.6	3.7	4.0	4.3	4.4	4.7
Q20	3.6	3.1 ↓	3.3	3.2 ↓	3.6	3.9	4.5	4.8

2) 選択別

活動別には、「舞台発表(ファンタジーワールド)」以外の場所で10回目の数値に低下が見られ、活動内容によって意識の持ち方に差が現れることが分かった。「フロアー劇」・「運動あそび」では、自分たちが望んだ選択場所での活動を行えなかったことにより、取り組みに対して前向きになれないことや気持ちを入れ替えることができない期間が続いていたと推察できる。さらに、「運動あそび」でQ6の数値が幼児教育祭2日目に低下したことは、来場者数が多く、持ち場の仕事に追われてしまったことによるものであると考えられる。

表8 舞台発表選択

	8	9	10	11	12	13	14	15
Q6	4.0	3.8 ↓	3.8	3.7 ↓	3.9	4.3	4.5	4.7
Q9	3.7	3.4 ↓	3.6	3.5 ↓	3.8	4.1	4.5	4.7
Q4	3.7	3.3 ↓	3.5	3.4 ↓	3.6	4.0	4.3	4.7
Q7	3.9	3.7 ↓	3.7	3.6 ↓	3.8	4.1	4.4	4.7
Q12	3.4	3.2 ↓	3.2	3.3	3.6	4.0	4.5	4.6
Q16	3.9	3.7 ↓	3.8	3.6 ↓	3.8	4.2	4.6	4.7
Q17	4.0	3.7 ↓	3.7	3.7	3.8	4.2	4.4	4.6
Q20	3.2	3.0 ↓	3.3	3.1 ↓	3.3	3.9	4.5	4.6

表9 フロアー劇選択

	8	9	10	11	12	13	14	15
Q6	4.0	3.7 ↓	3.8	3.6 ↓	3.9	4.2	4.6	4.7
Q9	4.0	3.7 ↓	3.5 ↓	3.6	3.8	4.1	4.1	4.7
Q4	3.8	3.3 ↓	3.6	3.4 ↓	3.6	4.0	4.3	4.7
Q7	4.0	3.7 ↓	3.5 ↓	3.6	3.8	4.1	4.1	4.7
Q12	3.7	3.3 ↓	3.1 ↓	3.4	3.5	4.0	4.5	4.5
Q16	4.0	3.6 ↓	4.0	3.5 ↓	3.7	4.2	4.6	4.8
Q17	4.1	3.7 ↓	3.6 ↓	3.6	3.8	4.1	4.4	4.7
Q20	3.6	3.1 ↓	3.3	3.4	3.4	3.9	4.5	4.6

表10 運動あそび選択

	8	9	10	11	12	13	14	15
Q6	3.6	3.8	3.9	3.7 ↓	3.9	4.3	4.6	4.5 ↓
Q9	3.7	3.3 ↓	3.6	3.5 ↓	3.7	4.1	4.4	4.7
Q4	3.6	3.4 ↓	3.5	3.4 ↓	3.6	4.0	4.3	4.7
Q7	3.7	3.7	3.5 ↓	3.6	3.8	4.2	4.2	4.7
Q12	3.4	3.2 ↓	3.1 ↓	3.4	3.4	4.0	4.4	4.8
Q16	3.9	3.9	4.0	3.6 ↓	3.8	4.3	4.5	4.8
Q17	3.9	3.8 ↓	3.9	3.7 ↓	3.8	4.2	4.4	4.8
Q20	3.1	2.9 ↓	3.2	3.2	3.2	4.0	4.4	4.7

2. 教員アンケート

教員アンケートの結果として、14回目の幼児教育祭1日目の評価が急上昇している。この前日に付属幼稚園の子どもたちを招いてリハーサルを実施したことで、そこで得た課題を修正し本番に向けて意識を高めて団結しようとしている学生の姿から、共通理解を持つことの大切さを教員が強く感じ取ったためではないかと考えられる。また、幼児教育祭2日目(15回目)に微妙な数値の減少があるものの、全体的に数値が上昇し、最後に全項目とも高い評価を得たことは、教員間で、共通理解の必要性を意識しながら、毎回授業後に振り返りの場を設定し検討した成果の表れである。また、教員はサンプル数が少ないため個人評価の影響が大きく出ることから、今後は自由記述等の反省を記録で残すなど、より詳細なデータを収集していきたい。

表11 教員アンケート (五件法平均値)

	8	9	10	11	12	13	14	15
Q6	3.0	3.3	3.6	3.4 ↓	4.0	3.9	4.7	4.6 ↓
Q9	4.0	2.9 ↓	3.6	3.5 ↓	4.0	4.3	4.7	4.8
Q4	3.8	3.0 ↓	4.0	3.6 ↓	4.0	4.0	4.8	4.8
Q7	4.0	3.0 ↓	3.7	3.6 ↓	4.0	4.1	4.8	4.7 ↓
Q12	3.7	2.9 ↓	3.3	3.4	4.0	4.0	4.6	4.5 ↓
Q16	3.0	3.8	3.8	3.5 ↓	3.7	4.0	4.8	4.7 ↓
Q17	3.0	3.0	3.8	3.5 ↓	4.0	4.2	4.9	4.7 ↓
Q20	3.6	3.1 ↓	3.3	3.0 ↓	3.6	3.9	4.8	4.8

3. 学生アンケートと教員アンケートの比較

双方のアンケート結果を比較すると、同様の時期に数値の低下が現れていた。このことから、学生と教員が同じ課題意識を持ち、共通理解をしながら授業に取り組んでいたことが理解できた。また、Q20「子どもの反応を活かし、皆を巻き込みながら保育をする」は、双方とも幼児教育祭当日まで数値が4.0に到達しなかった。教師役と子ども役を交代しながらロールプレイをする過程の中で、設問の“子ども”を“クラスの仲間”として置き換えて評価できていないことが推察され、項目再考の必要があると考える。今後は、学生間、教員間、学生と教員間の三方向の「共通理解」を深め、限られた時間の中で連携していくための方法を工夫していく必要がある。

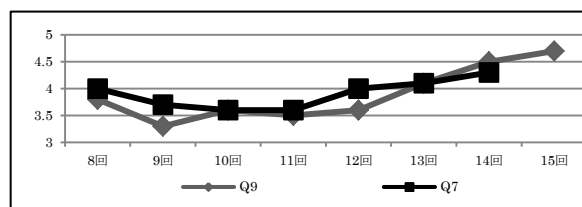


図1 Q9とQ7の比較 (学生)

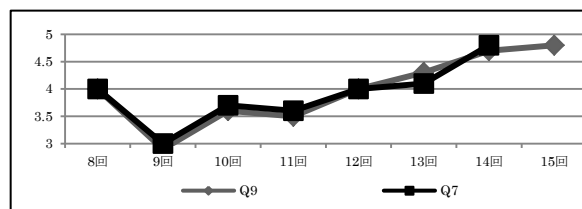


図2 Q9とQ7の比較 (教員)

4. 振り返り

17回(32時間)の授業のまとめとして最後に行った振り返りでは、個人の振り返りとクラスでの振り返りを行った。その後、全体でクラスごとの振り返りを発表し、授業内で学び合う経験をした。学生の振り返りについて選択別の特徴的な記述を抽出する。()内は実数値。

1) 舞台発表

①課題の達成について

- ・ねらいを立て、記録を書くことができた(17名)
- ・話し合いにより自分のすべきことを見つけることができた(7名)
- ・互いの気持ちを伝え合い相手の気持ちを受けとめることができた(5名)
- ・保育者に必要な責任感や協調性が身についた(4名)
- ・保育の場を想像しながら取り組めた(3名)
- ・みんなで支えあい協力することができた(2名)
- ・子どもの心に寄り添うことができた(1名)

②学んだこと

- ・クラス全員で団結・協力すること(30名)
- ・達成感(5名)
- ・相手の意見を聞こうとする姿勢(4名)
- ・自分の思いを伝えること(4名)
- ・気持ちを一つにすること(3名)
- ・自分の役割をきちんと果たすこと(3名)
- ・言葉や行動に思いやりを持つこと(3名)
- ・時間を有効に使うこと(2名)
- ・自己満足で終わらないこと(1名)

2) フロアー劇

①課題の達成について

- ・ねらいを立て、記録を書くことができた(5名)
- ・保育の場を想像しながら取り組めた(2名)
- ・自ら進んで行動に移すことができた(1名)
- ・自分にできることを取り組めた(1名)

②学んだこと

- ・クラス全員で団結・協力すること(10名)
- ・自分の思いを伝えること(5名)
- ・時間を有効に使うこと(2名)
- ・自分の取り組みがみんなに伝わること(2名)
- ・みんなで作り上げる楽しさ(2名)
- ・子どもへの接し方(2名)
- ・自分の仕事をこなすこと(1名)
- ・周りを良く見ること(1名)
- ・同じ目標に向かって頑張ること(1名)
- ・演じることの楽しさ(1名)

3) 運動あそび

①課題の達成について

- ・ねらいを立て、記録を書くことができた(17名)
- ・日々の課題を高く持ちすぎた(3名)
- ・計画的に進めることができた(1名)

②学んだこと

- ・団結・協力すること(20名)
- ・相手を認め合うこと(6名)
- ・子どもの目線になり声掛けをすること(5名)
- ・行動に移すこと(4名)
- ・自分の思いを伝えること(4名)
- ・安全面の配慮(3名)
- ・達成感(3名)
- ・計画の大切さ(3名)
- ・その場に応じた対応(2名)
- ・まとまることの大変さ(2名)
- ・保護者への接し方(2名)

[記述内容]

①課題の達成について

- ・毎回ねらいと内容を立てることにより意識が高まり課題の達成に繋がったと思う。みんなで意見を出して作り上げることができてよかった。
- ・課題を達成するために、毎回皆と協力して取り組むことができた。
- ・いろんな話し合いを繰り返す中で、お互いの気持ちを伝え合うことができ、また相手の気持ち

も受けとめることができた。

- ・クラスの話し合いや役割を決めていくことで、自分のすべきことを見つけることができた。

②学んだこと

- ・グループ内の雰囲気、やる気がでたりでなかったり、本当は楽しくやれるものが見つからないものになってしまったりするので計画的に作業を進めていくだけではなく仲間同士うまくやっていくことも大切だと思いました。
- ・自分だけでなく、みんながいるという仲間意識を持つことができ、相手の意見を聞こうという姿勢を身につけることができた。

個人の振り返りでは、話し合いを基に共通の課題を認識し、ねらいを立て、記録を取るにより、計画・実行・評価・改善を毎回の授業で行ったことが課題の達成に繋がったと記述した学生が最も多かった。学んだ内容としては、団結することや協力することの大切さを改めて実感する機会となったことがわかった。

また、各クラスの全体の振り返りとして出てきた内容は以下の通りである。

Aクラス：互いを意識し、高め合うことが大切。

Bクラス：互いの気持ちを伝え合うことが大切。

Cクラス：子どもの姿を捉えることや、具体的なねらいを立てることが大切。

Dクラス：常に改善しようとする大切さ。

Kクラス：一人一人が積極的に行動することと、伝達を怠らないことの大切さ。

Lクラス：ねらいを決めることや、時間の大切さ。

以上のことから一つの目的にクラス全体で取り組む場合、共通認識を持つことが大切になることを多くのクラスが実感している。互いを認め合い、理解することが課題達成に繋がることを授業を通して学び合うことができた。また、長期の保育実践をイメージした体験からの振り返りの持つ意味は大きい。

VI. まとめと今後の展望

本研究では、「報告・連絡・相談」を平成24年度の「教職実践演習(幼稚園)」の重点と捉え、授業を通して様々な立場における共通理解の必要性を調

査・分析してきた。教員間で共通理解を図ろうとした結果、学生の動向に対する教員の認識は近づいてきていたが、そこには、時間的な制約が伴っていたことも事実である。このことから、教員間においてはミーティングに更なる時間を当て、授業当日の事前打合せを行うなど、限られた時間の使い方が、今後の課題として持ち上がった。そのため、打合せの方法としては、「伝言ボード」を活用したり、授業前に定期的な打合せを行ったりして、より共通理解を図る方法を工夫していきたい。共通理解のために時間を費やすことは、学生の授業ごとの目的意識を全体として高めていくことに繋がると考えられる。

また、学生の振り返りからも、一つの活動を通して互いの気持ちを伝え合うこと(共通理解)の重要性を再認識した意見が多くあがり、教職実践演習が「まとまりや連携」について学ぶことのできる内容であったことが窺える。教職実践演習は、社会性や対人関係能力に対する事項に準じた内容を習得することを目的としていることから、この授業内容が学生の学びに果たした役割は大きい。学生の主体性に任せることから、学生自身の気づきを通して、振り返りや記録を残すことが、共通理解の基盤となることが理解できた。

なお、学生の授業の振り返りからは、記録を取り、毎回ねらいや内容を明確にし、反省を行うことが課題の達成につながったとの省察が多く、記録の必要性を理解する多くの意見から、保育現場における記録の必要性について体験を通して理解したものと考える。そのため今後は、実習記録や教職実践演習での記録を通じて、記録の意義や意味をより深く検討していきたい。

引用文献

- 1) 中村治人・大岩みちの. 『岡崎女子短期大学における教職実践演習(幼稚園)初年度実践報告-教職実践演習の実施に係る課題-』. 東海教師教育研究第27号. 2013
- 2) 小川宣子. 『心に届く子育て支援能力を育む幼児教育祭-子どもとの双方向的表現空間を通しての遊びの支援-平成19年度文部科学省「特色ある大学支援プログラム」選定事業取組報告書. 岡崎女子短期大学幼児教育学科. 2009

参考文献

- ・ 山田悠莉・米窪洋介・鳥居恵治・大岩みちの・

佐善圭・谷田貝雅典・赤羽根有里子・小野隆. 『教職実践演習を通じた気づき-振り返りの視点から-』. 保育者養成協議会第51回研究大会. 2012

- ・ 岸本美紀・長柄孝彦・妹尾美智子・本山益子・鳥居恵治・大岩みちの・佐善圭. 『保育内容を実践に活かす取組としての幼児教育祭-「幼児教育祭」を保育現場につなげるために-』. 岡崎女子短期大学紀要第42号. 2009
- ・ 岸本美紀・妹尾美智子・鳥居恵治・大岩みちの・佐善圭・山田悠莉・水谷誠孝・本山益子. 『保育内容を実践に活かす取組としての幼児教育祭 その2-保育内容の理解を深め、実践につなげるために-』. 岡崎女子短期大学紀要第43号. 2010
- ・ 山田悠莉・妹尾美智子・鳥居恵治・大岩みちの・佐善圭・岸本美紀・水谷誠孝. 『保育内容を実践に活かす取組としての幼児教育祭 3-効果的なチーム・ティーチングを行うために-』. 岡崎女子短期大学紀要第44号. 2011
- ・ 山田悠莉・妹尾美智子・鳥居恵治・大岩みちの・佐善圭・岸本美紀・水谷誠孝. 『保育内容を実践に活かす取組としての幼児教育祭 3-効果的なチーム・ティーチングを行うために-』. 岡崎女子短期大学紀要第44号. 2011
- ・ 中央教育審議会. 「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」 「別添1 教職実践演習(仮称)について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyochukyo0/toushin/1212707.htm .2006/7/11. 閲覧日2013/6/12
- ・ 文部科学省. 『幼稚園教育要領』. フレーベル館. 2008. 4
- ・ 文部科学省. 『幼稚園教育要領解説』. フレーベル館. 2008. 10
- ・ 厚生労働省. 『保育所保育指針』. フレーベル館. 2008. 4
- ・ 厚生労働省. 『保育所保育指針解説書』. フレーベル館. 2008. 5

付記

この研究は、全国保育士養成協議会第52回研究発表論文集およびポスター発表を加筆修正したものである。